



東郷湖のうるおいに 天然のハウスのごとく覆われて。

激動の二十世紀、という言葉がよく聞かれるように、それはドラマのたくさん詰まった時代だった。その名を冠した湯梨浜町の東郷二十世紀梨は、栽培され始めてすでに二世紀をこえ、もはやひとつの文化となっている青い果実なのだ。寺地邦恵さんが、まさに文化事業ともいえるこの梨の生産に携わるようになったのは、二人目の子が産まれたあとだった。かれこれ三十年のベテランといえる。四月に花が咲いてすぐ、気を抜けない忙しさが訪れる。手作業による交配だ。花のいのちは短いから手際よく進め、やがて実がつくと摘果、そして袋かけ。一個一個に愛情を注いでいき、気がつけばもう夏。収穫だ。よろこびも束の間、来年に向けての土づくりがはじまって……。二年を通して梨と語り合う時間が過ぎていく。もちろん大変な作業だが、

「だれかの指示を受けて、つまり人に使われての仕事ではなく、自分たちの意思で計画し、自分たちのペースで梨と向き合っていく仕事だから、ストレスは少ないのだと思います」

傾斜地の畑で、大空を見上げるようにして語る。百年の恵みであるこの梨を見守るのは、いうまでもなくこの地の風土だ。東郷湖のうるおいが大きくあたりを覆い、それはいわば天然のハウスのように果実たちを慈しむ。おそらく収穫する人びとも、そうしたうるおいに満ちているにちがいない。

東郷二十世紀梨農家
寺地邦恵



ゆ
う
ゆ
う
、
ゆ
り
は
ま